

Contents

■学部長メッセージ

■特集 1 特色ある教育プログラム
JABEE 認定プログラム
Glo-BE プログラム
Entre-to-Be プログラム

■特集 2 学生食堂レポート
食生活からの学生生活支援

■2015 年就職状況の概要

■学科ニュース

■連載／卒業生インタビュー
東京技術計算コンサルタント株式会社
代表取締役社長 倉川清志 氏

■平成 27 年度学位取得者

■事業募金寄付者ご芳名

■トピックス 学生 FD 推進プロジェクト
新キャラクター紹介

■新任教員紹介

■ CAMPUS NEWS
第 9 回風力発電コンペ
第 39 回鳥人間コンテスト

■平成 28 年度後期行事予定表

生産工学部における人材育成



日本大学生産工学部
学部長
落合 実

◆ 学生生活のスタート

生産工学部では4月1日の開講式に新入生を迎え、4月8日武道館での日本大学入学式、4月11日から前期授業を開始しています。新入生はオリエンテーション旅行、スポーツ大会などの行事、そしてこの半年間で教養科目を中心とした履修計画・登録、授業、レポートや演習・試験、単位の修得などといった一連を経験して大学生としての自覚が芽生えたことと思います。

2年生は大学生活にも慣れ、教養系科目に加え、キャリア教育系科目と専門科目を履修して学科の専門性や特徴を実感します。3年生は専門科目を中心に受講しますが特に生産実習を履修します。

生産実習は夏季休暇中に企業などで2週間から1カ月間行うもので生産工学部の特徴科目となっています。この実習は業種や業界の実情を理解する体験学習で将来の就職先を決める上で貴重な経験となります。

4年生は卒業研究と同時に大学院進学、就職あるいは留学など、自分の希望する進路に向けて活動し、後期は卒業研究に専念します。

大学院の学生は、授業と共に修士論文のための研究を進めています。また学部の実験や演習などの授業で学生をサポートするTA（ティーチングアシスタント）としての仕事は大学院生自身の知識向上に加えて指導やコミュニケーションの養成にも繋がっています。

◆ 社会の多様化と大学生

社会や経済活動がグローバル化する近年、多方面で「多様化」がキーワードとなっています。大学生の気質や価値観もその一つであります。

昭和から現在までの現役高校生の進学率が文科省「平成26年度学校基本調査」結果にまとめられています。これによると昭和初期に数%であった大学進学率は年ごとに増加して、昭和40年代初めに一旦減少して10数%になりますがその後も増加し、昭和50年代初めごろには約20%を超えています。そしてその後の昭和から平成にかけて進学率は僅かに減少しますが平成2年ごろから再び増加して、平成27年では約48%に達しています。この進学率は経済活動の動き、大学生の気質や考え方とも連動していると思います。

昭和40年代、特にその後半は日本の経済活動が著しく発展し、労働賃金や給与も年ごとに大きく膨れた頃で、その後の経済発展も予測されていました。その頃の大学生の多くは「学ぶ意欲」が高く、「志」を持ち、また社会や国家、経済や政治など多面的議論を交わしていました。大学や社会では自主性が重んじられ、実社会に出る前の自由な勉強期間が与えられた大人として扱われ、そして「学生さん」と呼ばれて優遇されることもありました。これらは当時の大学生に日本の将来を託したいという社会の人たちのメッセージ、願望の表現のように思われます。そしてこの時代の学生が今日の日本経済・社会の発展に大きく貢献してきたことは言うまでもありません。

学生の「志」や「勉強意識」そして考え方は社会と生活環境で多様化します。パソコンが登場した昭和50年代初めから情報のデジタル化が進み、それらは21世紀に入って更に発展し、ITから現在はIoTの時代となっています。家庭にはパソコン、手には携帯電話、スマートフォンという環境です。

一方、実社会ではグローバル化した社会・経済活動の変化、日本における少子高齢化と経済活動の動向など多方面で課題があります。学生はこのような社会環境の下、取捨選択した多くの情報から自分の価値観と将来への夢、志と目標を携えて大学生活を過ごしています。その価値観、志などは学生一人ひとりで異なり、多様です。大学ではこの多様な志や目標を達成するために必要な「学生が自ら学び・考え・行動するための知識や能力」を特徴ある教育・研究を通して養っています。

◆ 生産工学部が育てる人材；社会が求める人材

大学の使命の一つである社会貢献では社会が求める人材の育成があります。生産工学部は1952年（昭和27年）工学部（現理工学部）に新設された「工業経営学科」を前身とし、1966年（昭和41年）に「生産工学部」と改組され、本年が創設64年目となります。

創設された当時は国内生産の増加、特に中小企業の生産技術力を高めることと企業に必要な経営力を強化する必要がありましたので「経営管理能力を備えた技術者の育成」を本学の教育理念としています。この理念にある「経営管理能力」は生産現場の技術者において重要な能力であることから、現在の理念にも掲げています。

生産工学部では教育の基本理念の下、社会動向に対応した人材育成を進めて来ました。近年の多様化する社会のニーズ、特にグローバル化する社会に対応して、「世界で活躍できる経営管理能力を備えた技術者」の育成を目指した「Glo-BE（グローバルビジネスエンジニア）」プログラムを昨年から開始しています。また、本年度からは「経営管理能力」をより具体化し、充実させるために、生産現場から会社の経営管理まで視野に入れ、「事業継承者・企業家として活躍できる技術者」を育成する「Entre-to-Be(アントレトゥー・ビィ)」プログラムを開始しています。

社会では技術者を求めています。国も「日本再興戦略」改定2015、そして同2016では名目GDPの達成値を示して成長戦略として多くの施策を出していますが、これらの中で技術者の活躍施策が随所に謳われています。生産工学部では社会のニーズに対応し、教育理念にあるように経営管理能力と技術力を兼ね備え、加えてグローバルな視点、経営者としての視点で物事を見ることが出来る技術者を育てています。

以上のように時代と共に変化する社会の要請に応えて、生産実習などの生産工学系科目、「めんどろみー番」を自負する教育を基本に特徴を持った教育と研究体制で生産技術者を育成しております。そして本学部の卒業生は社会で高く評価されています。

生産工学部は学部の基盤である「教育力」、「研究力」、「就職力」、「組織力」そして「財政力」をより充実させると共に教職員と校友（卒業生）が協力して、日本で唯一の生産工学部のさらなる発展のために「魅力あふれる大学づくり」を行っていく所存でございます。今後ともご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



表紙：津田沼キャンパス 39 号館 2 階のカフェテリア
[Creation Commons]



JABEE（日本技術者教育認定機構）認定プログラム、 Glo-BE（グロービィ）プログラム、 Entre-to-Be（アントレトூービィ）プログラムを開設

【まえがき】

18歳人口が減るなか、大学教育の質（教育力）及び大学の質（大学力）を保証することは喫緊の課題です。このような社会的動向に対し、本学の教育理念である「自主創造」を踏まえ、各学部で培われてきた独自性を確保しつつ、学部間の連携も視野に入れた教育・研究を推進する必要があります。そのため今後も、学生の支援並びに教育・研究水準を高める必要があるのと共に、本学のスケールメリットを生かした特色あるプログラムの構築を図ることは必要不可欠です。

昔から「読み・書き・ソロバン（計算）」とはよく言われたもので、学びの力などには必要不可欠な基礎的能力です。最近では、「ソロバン（計算）」をコンピュータに任せる傾向があり、「読み・書き・コミュニケーション」に関するスキル（RWCスキル）が重要視されています。また、それらの中核

にあるのは「傾聴力」です。そのスキルを醸成する際に重要となるのが、アクティブ・ラーニング（主体的学習）を促す授業の導入であると考えています。

生産工学部では、以前からアクティブ・ラーニングなどを採り入れたJABEE（日本技術者教育認定機構）認定プログラム、2015年度入学生から「Glo-BE（グロービィ）」プログラム、そして本年度入学生から「Entre-to-Be（アントレトூービィ）」プログラムを開設しました。

MIT元学長のチャールズ・ベストは「お金は分けると減るが、知識は分けると増える」と言っています。この言葉をかりると、この3つのプログラムに関しては「知識／知の拡大への投資」と捉えることができます。以下では、生産工学部の未来の姿ともいえる、3つのプログラムの特徴や現状を紹介します。

具体的な教育内容としては、1年次前期ではマネジメントの基本を、後期では実務家を中心とした実践形を学びマネジメントの本質を理解します。2年次前期では、徹底した企業家マインドの醸成を促し、後期では、チーム活動をベースに新規事業のアイデア創出と実際に事業計画書を作成することで、実際の経営者行動を体験します。3年次では、希望に応じて、ベンチャー企業や企業経営者を身近で見られるようなインターンシップ「生産実習」に参加します。これらの3年次までの科目は、すべて通常の単位取得の範囲内で行われるのも、本プログラムの特徴です。

本プログラムの指導に当たっては、生産工学部教員のみならず、マネジメント関連は本学商学部から専門の先生方、外部からは実務家さらに本学OB経営者が本プログラムの講師やアドバイザーとして参加しています。また、プログラム全体のアドバイザーとして、神奈川県と川崎市が主導して設立された第三セクターの「かながわサイエンスパーク（KSP）」が参加し、さまざまなアドバイスと支援を行います。

本プログラムの応募に当たっては、事業継承者を中心としているものの、将来企業経営に関わりたい人など企業家行動に興味をもっている学生全般も対象としています。従って、必ずしも保護者やご親族に経営者がいらっしやなくても応募できます。また、特定の業界、業種を対象としておりませんので、どの学科からも参加できます。尚、本年度の実績としては、当初

の募集人員60名のところ大変好評だったため、受講者数の枠を広げ、学科横断的に総数83名の学生が本プログラムに参加しております。

また、さまざまな学科に所属している学生と多様な講師陣とのコミュニケーションを深めるため、毎回、学生は連絡票に講義の理解のレベルのほか、質問事項や要望などを記入してもらっています。学生からの連絡票の内容を講師陣にフィードバックすることで、授業がより分かりやすい内容になるように改善され、プログラムが学生に沿って発展する仕組みを取り入れています。

「事業継承者・企業家育成プログラム」（Entre-to-Be）は、縦糸として各学科で行われる専門領域の教育、横糸として学科横断の企業家育成教育で織りなす複合的な教育プログラムで、2つの軸から日本大学が目指す「自主創造型人材」の育成を強化するものです。

科学や技術を社会に還元する「生産」活動を担うリーダーを育成してきた生産工学部が、その実績と伝統を礎に革新的な企業家育成プログラムを提供することで、次世代に活躍するリーダー的人材を育成し、さらなる発展を目指したいと考えております。

*詳細は、本学部ホームページを参照ください。

http://www.cit.nihon-u.ac.jp/special/entre_to_be/

Entrepreneurial Engineer Program

事業継承者・企業家育成プログラム

Entre-to-Be

アントレトூービィ

生産工学部は、設立以来、多くの経営者を輩出し、多くの経営者のご子弟を教育してきた実績と社会的ニーズに応えるべく、平成28年より理系学部初の本格的企業家育成プログラム「事業継承者・企業家育成プログラム」を開講いたしました。

「経済発展の基本は企業家行動にある」とし「企業家によるイノベーション」を提唱したのは、「イノベーションの父」と言われる経済学者シュンペーター。さらにイノベーションによる顧客創造、市場創造の重要性を説き、日本に「マネジメント」という概念を紹介した経営学者ドラッカー。急速な少子高齢化と情報化によってめまぐるしく変化する日本社会は、従来と異な

る新たな経済発展のしくみ、すなわち企業家行動による経済発展が国の政策の一つとなってきています。このような社会的要請に応えるべく、産業界の中核人材として「経営がわかる技術者」「技術がわかる経営者」を育成しつつ育ててきた生産工学部は、日本の産業界に多くの影響を与えたこの2大学者の考えに基づき、スキルや知識にとどまらず心構えにまで至る究極の人材育成プログラムを開発いたしました。

この「事業継承者・企業家育成プログラム」の通称「Entre-to-Be」は、企業家 entrepreneur の省略形と未来を示す to-be を合成させた名称で、企業家候補生という意味です。



講義を熱心に聴く「Entre-to-Be」履修生（平成28年6月4日撮影）

CIT Global Business Engineer Program

グローバル人材育成プログラム

Glo-BE グロービー

グローバル人材育成のための教育の充実を図るため、ビジネスエンジニアリングをグローバルな視点から見るができる技術者の養成を目的として、2015年度入学生から「Glo-BE（グロービー）」プログラムを実施してきました。このプログラムは「学科横断型プログラム」であり、2カ年に渡って受講する学生に期待している学修成果は、以下の3つです。

- これからのグローバル社会で必要なことを認識し、またその意識を高めていくこと
- 英語を使ってコミュニケーションすることへの抵抗感をなくし、自信をつけていくこと
- 工学的発想による協働的課題解決能力を身に付けていくこと

学生たちは、このプログラムで体験することがおそくすべて初めてづくしの中で、みな少なからず失敗経験や挫折感を味わいながらも真剣に課題や活動に取り組み、たくましく成長してくれています。

GBE I（グローバル・ビジネスエンジニアリング）の授業では、グローバル企業の研究やそれらの企業へのフィールドワーク、またその調査結果報告や新規事業アイデアのプレゼンテーションなどを、1年を通して実践・体験しました。企業訪問の際は、初めてのスーツ・ネクタイで身を固め、緊張のあまり受付で呼び出し電話をかける指が震えたといったほほえましい声も報告会で聞こえました。しかし、仲間同志が支え励まし合い、最後には目的・目標を達成したときの喜びは他に代えがたいものがあつたようです。

英語コミュニケーション演習に関する授業では、ベルリッ

ツのネイティブ講師の発する英語に、最初何を言っているのか全く分からなかったという学生も多く見られました。しかし、e-Learningも含めた地道なトレーニングの積み重ねの成果で、1年が経ったころには「講師の英語でのジョークも分かるようになった」「聞き取りが上手になってきて話すことにも抵抗がなくなってきた」といった上達実感を語ってくれる学生が数多く出るようになりました。

TOEICスコアで見たこの1年間での英語力の伸びもほぼ期待通りの結果が出ています。

3月にはプログラム受講生15名が米国シアトルにある語学学校に短期留学し、英語力の研鑽とともに、ホームステイやボーイング社の工場見学など異文化体験・海外生産現場体験をしてきました。

全体として、学生たちが1年目のGlo-BEプログラムを通して得た学修成果は、「体験」を通して得たさまざまな「気づき」です。その気づきが、考えることの面白さや学び続けることの大切さの実感につながったことにあると考えています。

2年目のプログラムでは、個人でのフィールドワークや英語でのグループディスカッション、ディベートなどより実践的でハードな内容がふんだんに盛り込まれています。しかし、1年目で培った気づきや主体性を土台に知的なたくましさを増し、皆このプログラムの所期の目的を達成してくれるものと期待しています。

* 詳細は、本学部ホームページを参照ください。

http://www.cit.nihon-u.ac.jp/special/glo_be/



海外研修修了式



海外研修の様子

Japan Accreditation Board for Engineering Education

技術者教育プログラム

JABEE 認定プログラム

21世紀に入り、日本の大学の理工系・農学系教育に激震が走った。日本技術者教育認定機構（通称 JABEE、<http://www.jabee.org/>）による技術者教育プログラムの本格的な認定が始動したからです。

認定基準は、基準1～4、及び分野別要件などから構成されており、国際的な同等性を持っています。そして、学習・教育到達目標（Plan）、教育手段（Do）、学習・教育到達目標の達成（Check）、及び教育改善（Act）からなる「PDCA」サイクルの実質的な活動が必要となります。これまで、JABEEによって認定された本学部の各コースに関し、認定年度、認定分野、及び育成する技術者像などを別表に示します。

また、本学部の4つのJABEE認定プログラムでは、学生が技術者として国内外で活躍するために必要となるチームワーク力や課題解決力などのジェネリックスキルを涵養するために、2015年度に分野横断型PBL（Project Based Learning）教育を構築しました。



分野横断型PBL教育は、2年次ゼミの授業の一部を用いて実施され、学生は多様性のあるチームでの活動により、課題解決のデザインプロセスを経験できるように授業設計がされています。専門分野の異なる学生が5～6名のチームを編成し、自身の「学び」を課題として、より良い学習効果を得るための解決策を、KJ法や2次元展開法を活用して導出しています。この課題解決過程の経験をとおして、学生は「課題達成のために自己の役割を的確に果たしながら、他者の行動を判断し働きかけることができる」というチームワーク力を身につけています。

本年度、4つの学科のJABEE認定プログラムは継続審査として一斉受審に臨みます。

■生産工学部のJABEE認定プログラム

	電気電子工学科	土木工学科	応用分子化学科	数理情報工学科
認定コース名	クリエイティブエンジニアリングコース	マネジメントコース	国際化学技術者コース	情報工学コース
認定年度	2010年度（WA）＊	2005年度（WA）	2005年度（WA）	2006年度（WA） 2011年度以降（SA）＊
認定分野	電気・電子及び関連の工学分野	土木及び関連の工学分野	化学及び関連のエンジニアリング分野	CS（コンピュータ科学）分野
育成する技術者像	現代社会を支える基盤技術である電気・電子工学の基礎から応用までの知識を身につけ、課題を提起し、それを解決する能力を有する創造性豊かな技術者および研究者	施設・構造物の計画・設計・施行、維持管理までの土木技術の基礎を修得し、社会基盤の建設にともなう計画から維持管理、さらには事業経営など、総合的にマネジメントができる技術者	自主創造の教育理念と生産工学部の教育目標に基づいて、国際的な視野に立ち、科学技術が担う社会的責任と人類の幸福を念頭に入れ、自立的かつ協働的に化学関連分野における問題を発見し、分子論的に解決策をデザインできる者	数学、自然科学を初めとする基礎学力、情報数学を初めとするソフトウェアに関する基礎的かつ数理的素養、情報工学の各種中核的要素技術、さらにそれらの技術に基づいた ●ソフトウェア開発における実践的技術力の基礎的素養 ●コンピュータサイエンスに基づいた情報技術開発能力の基礎的素養を持った技術者
修了者数 （2016年4月現在）	187名	477名	258名	258名
備考（URL）	http://www.ee.cit.nihon-u.ac.jp/	http://www.civil.cit.nihon-u.ac.jp/education/index.html	http://www.amc.cit.nihon-u.ac.jp/	http://www.su.cit.nihon-u.ac.jp/index.php/ja/

* WA：Washington Accord（ワシントン協定） SA：Seoul Accord（ソウル協定）

【あとがき】

本学部の特色ある3つのプログラム、即ち、「Entre-to-Be（アントレトゥービー）」、「Glo-BE（グロービー）」、及び「JABEE認定」プログラムについて、それぞれ概要、実績、

及び現況を紹介してきました。いずれにしても、学生が自らの潜在的能力を引き出し、その能力を発揮できるように、きめの細かい教育をする必要があると考えています。



食生活からの学生生活支援

2014 年、後期授業スタートとなる9月22日から、津田沼キャンパス2号館と39号館の学生食堂で、1日100食（各50食）限定の「50円朝食」をスタートしました。

朝食を取らない若者が多い中、食育と生活改善を目的として、やっと実現に至りました。特に親元を離れ、ひとり暮らしをしている学生にとって、朝の忙しい時間に料理するのは大変だろうし、とはいえ外食も予算的には厳しいでしょう。また、早めにキャンパスに来て、朝食を取ってから遅刻せずに1時限の授業に出席してもらいたいという意図もありました。

図1 朝食の利用学年

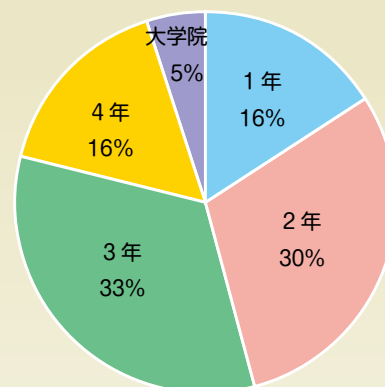


図2 朝食の利用頻度

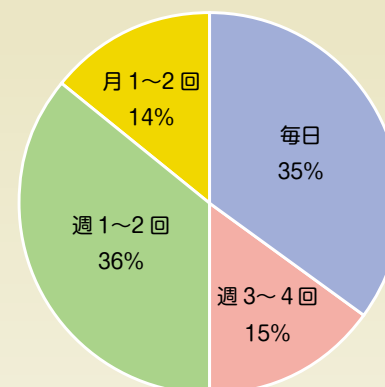
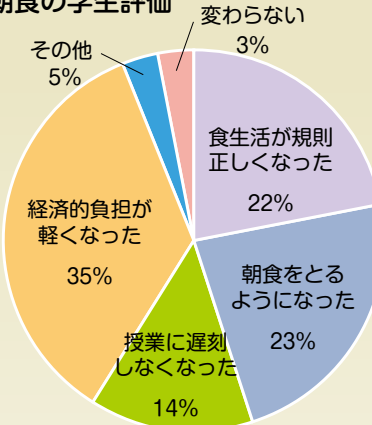


図3 朝食の学生評価



昨今、他大学においても「100円朝食」の話題がチラホラと聞かれる中、維持会等のご支援と各食堂の協力により、330円のメニューを50円で提供できるようになりました。現在では、実硯キャンパスでの30食を含め、3食堂で130食の「50円朝食」を提供しています。

メニューは、各食堂で工夫を凝らして頂き、卵料理や焼き魚・肉料理の他、納豆・サラダ・煮物など好きな小鉢を複数選べるものもあり、多種日替わりです。

図1~3は、約1年経過した際、津田沼キャンパスの2つの食堂利用学生に行ったアンケートの結果です。

図1では、2・3年生の利用が多く、全体の約66%を占めていることが分かります。また、利用頻度については、図2にあるように週に1回以上が全体の86%を占め、毎日利用している学生も35%に達しています。そして最も気になる「50円朝食」の学生評価は、図3に示す通り、上位から「経済的負担が軽くなった」「朝食をとるようになった」「食生活が規則正しくなった」「授業に遅刻しなくなった」とあり、当初の目的はほぼ達成されているように思います。

今後は、「価格を上げてでも食数を増やしてほしい」など、自由記述で得られた改善要望を検討し、より学生目線の学生食堂にしていければと考えます。また、39号館食堂の建設時には、将来的に、学生証のメモリーチップに食事の履歴やカロリーなどを保存し、そのデータを本人のみに限らず父母にもお知らせできるように考えています。

食生活改善に向けてさらなる取り組みも検討し、より良いキャンパスライフの提供を目指して行きます。

朝ごはんを食べてみましょう！！

朝ごはんは、体の調子を整え、1日の活動の土台になります。

朝食はどれくらい食べたらい好呢？

年齢/性別	男性	女性
18~20歳	660	490
	2650	1,950

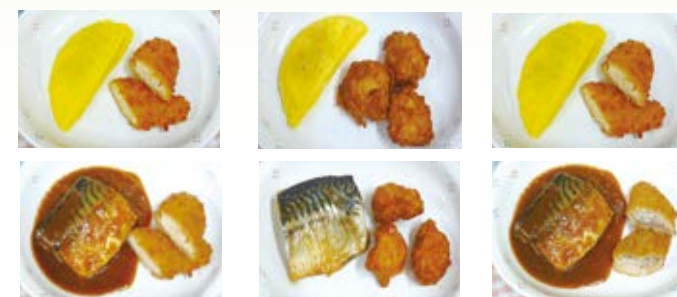
【参考】2014年度日本人の食事摂取基準（厚生労働省）より算出。単位はkcal。1kcal=4.184kJ。

＜メニュー例＞

メニュー	カロリー	たんぱく質	脂質	糖質
卵とじ	23	3.0	1.0	1.0
焼き魚	56	1.0	1.0	1.0
納豆	60	1.0	1.0	1.0
サラダ	83	1.0	1.0	1.0

朝定食のメニュー例

津田沼キャンパス 39号館学生食堂 朝定食メニュー



津田沼キャンパス 2号館学生食堂 朝定食メニュー



実硯キャンパス学生食堂 朝定食メニュー



●メニューは各食堂で日替わりで変えています。

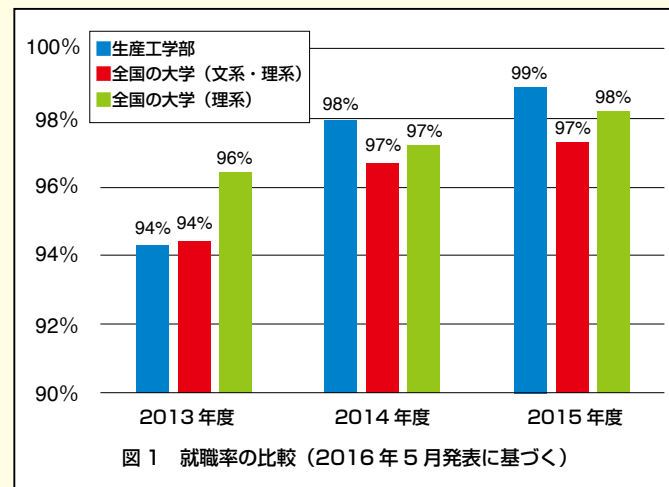
2015 年就職状況の概要

1. 2015 年度就職状況

2015 年度における生産工学部の就職率は 98.9% でした。2015 年 5 月付で厚生労働省と文部科学省から発表された 2015 年 3 月卒業の全国の大学生の就職率は 97.3% であり、そのうち理系の学生の就職率は 98.2% でした。この就職率は厚生労働省がデータを取り始めた 1996 年から見て最高の就職率になっているとのことです。生産工学部の就職率も上昇を続け、ほぼ 100% に近い就職率となっています。

ここで、就職先について見てみます。既に 4 月の父母懇談会で配布いたしました「ザ・就職」に掲載されている通り、2015 年度学部卒業生の一部上場企業への就職率は 21.9%、大企業（従業員 500 人以上）への就職率は 49.5% でした。また、2015 年度大学院修了生の一部上場企業への就職率は 38.2%、大企業への就職率は 61.8% でした。これらの数字は、例えば、就職力で評判の高い金沢工業大学の数字（就職率 99.7%、一部上場企業への就職率 26.8%、大企業への就職率 33.6%、金沢工業大学 HP より引用）と比べても遜色ありません。このように、生産工学部ならびに生産工学研究科では全国でもトップレベルの就職率・就職先を維持しています。

なお、大学院進学者を除く全卒業生に対する就職者の割合も 92.8% と非常に高いです。この値は東洋経済 ONLINE 版（平成 28 年 3 月 22 日付）の実就職ランキングで比較すると東京工業大学・東京理科大学と同程度の数字となっています。



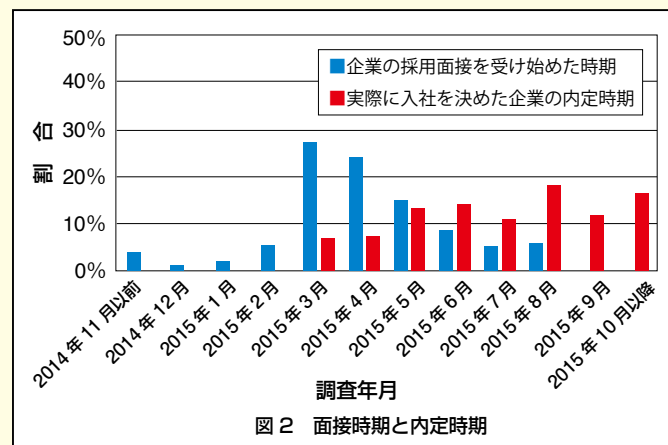
2. 生産実習先と就職先との関係

生産工学部の特長である 3 年次を実施している生産実習における実習先と就職先の関連について昨年度初めて詳細な調査を行いました。その結果、学部全体では生産実習先

を就職先とした学生は約 7% でした。学科によってはこの割合が 10% を超える学科もあります。生産実習は 50 年の歴史があります。現在、各大学・各企業で行われているインターンシップの先駆けとなっています。しかし、生産実習はその名の通り実習です。したがって、①期間が長い（2 週間から 1 カ月）ことと、②実際の仕事を体験できる（OJT のように指導してもらえる）点が通常のインターンシップとは大きく異なります。この経験が、当学部の離職率の低さ（卒業後の離職率は約 15%、全国平均は約 32%）にも表れています。今後、生産実習先への就職の割合がどのように推移するのかは分かりませんが、大学としては生産実習先の選定が重要な就職活動の一環となっていることを学生により一層意識してもらえるように取り組みを続けていきます。

3. 就職状況調査結果・採用面接時期と内定時期について
2015 年度学部卒業生のうち 1093 名に対する就職状況調査（2015 年 12 月実施）結果から採用面接時期と内定時期などについてお知らせいたします。なお、記載されている割合はすべて学部全体の割合です。

経団連の指針による 2015 年度の採用選考活動開始日は 8 月 1 日でした。しかし、図 2 に示すように実際の採用に関わる面接は 2014 年 11 月から行われていたことが分かります。また、2015 年 3 月に内定をもらい、そこに入社した学生もいます。すなわち、4 年生になる前に就職先を決定していた学生が 7% いることが分かりました。就職に関する協定の見直しで採用選考時期などが毎年変わる最近ですが、大学としては学生に不利にならないような形で就職活動への指導を行っています。なお、内定を得た企業数が 1 社だった割合は 53%、第一希望の企業に就職を決めた割合は 61%、3 月に開催した生産工学部就職セミナーで面談した企業から内定を受けた割合は 39% でした。



学科ニュース

機械工学科

学外オリエンテーションでマザー牧場へ

今春、機械工学科では学部の新入生 205 名、大学院修士課程 35 名を迎え入れることができました。

1 年生は入学して早々の 4 月 9 日～10 日に、学外オリエンテーションでマザー牧場と鴨川へ行ってきました。

夕食後には、機械工学科を知るウルトラクイズで学科について楽しみながら学びました。



オリエンテーションでの夕食後のウルトラクイズ

5 月 18 日の学科対抗スポーツ大会では晴天に恵まれ、玉入れや障害物競

走、リレーなど、真剣に取り組む 1 年生の姿が見られ、白熱した競技会となりました。結果は 4 位と入賞には届きませんでしたが、学生生活を共に頑張れる友人ができたことでしょう。



スポーツ大会での記念撮影

2 年生は、講義に占める専門教育科目の割合が増え、機械工学の基礎知識や設計のための製図などを学んでいます。とくに、2 年次ゼミでは、プレゼンテーション力の養成や各教員による研究紹介が行われ、徐々にエンジニアとしての考え方やモノの捉え方が養われるとともに、後期からのコース配属に向けて自分の将来を考える時期が来ています。

3 年生は、プロジェクト演習での電動

カートまたは風力発電装置とそのエネルギーを利用した装置の設計・製作に取り組んでいます。また、夏休みに行われる生産実習（インターンシップ）の準備を進めており、夏休みが明けたころには実社会での就業体験に

よってエンジニアの卵として成長していることでしょう。

最後に、4 年生は就職活動や大学院進学のための勉強と、卒業研究に奮闘しています。

その他、機械工学科のホームページ（<http://www.me.cit.nihon-u.ac.jp/>）にてさまざまなニュースが紹介されていますので、ご興味のある方はそちらもご覧ください。

電気電子工学科

新入学生と教員の一泊旅行を実施

本学では毎年学科ごとに、新入学生同士、学生と教員の親睦を深めるために、一泊旅行研修（オリエンテーション）を実施しています。

本年度の電気電子工学科のオリエンテーションは、4 月 16 日（土）、17 日（日）の二日間、那須千本松牧場と日光東照宮を見学しました。



千本松牧場での班別の研修風景

学生生活、勉学方法等について学生と教員が議論しました。二日目はあいにくの曇りでしたが、二日間の旅行を通して親睦を深めることができました。

斎藤大輔君平成 27 年度研究科長賞（学術・分科部門）を受賞

大学院生（電気電子工学専攻 博士前期課程 2 年）の斎藤大輔君が、生産工学部研究科長賞を受賞しました。

平成 26 年 12 月に開催された「SCIS & ISIS 2014」（ソフトコンピューティングに関する国際会議）において、Best Poster Award を受賞したことによるものです。対象論文は「Mutual Learning Using Nonlinear Perceptron」であり、斎藤君が所属す

る研究室の原一之教授とともに取り組んだ研究成果をまとめたものです。研究成果は、一部の分類済のデータを用いて、その他の大量の未分類データが分類できる利点があり、大変意義のあるものです。



斎藤大輔君（左）と原一之教授（右）

土木工学科

土木工学科ホームページもご覧ください。
http://www.civil.cit.nihon-u.ac.jp/

新入生 207 名を迎えて 新学期スタート

新入生を対象に、学生同士の交流、教員との交流を図ることを目的として、4月16日、17日にオリエンテーション旅行を実施しました。

地図と測量の科学館、JAXA 宇宙センターを見学し、宿泊先の袋田温泉では、社会で活躍されている OB の方々から講演を頂いた後、グループに分かれてのミーティング、全体研修を行いました。一生の仲間と共に充実した大学生活をスタートさせる良いきっかけになったのではないのでしょうか。

生産工学部スポーツ大会が5月21日に実習キャンパスで開催されました。全ての競技で土木工学科は健闘、総合力で他学科を圧倒して見事優勝を果たしました。

平成 27 年度大会は雨天中止、平成



◀ 生産工学部スポーツ大会優勝

26 年度大会は準優勝でしたが、平成 25 年度大会までは暫く連続優勝していました。2 年ぶりに土木伝統の集中力、団結力を証明することができました。新入生にも土木の DNA がしっかり引き継がれています。

第 17 回「土木のある風景」 写真コンテストにて優秀 賞を受賞

土木学会関東支部主催の第 17 回「土木のある風景」写真コンテストで、3



▶ 「多くの命を繋ぐ道」撮影：野口万里奈

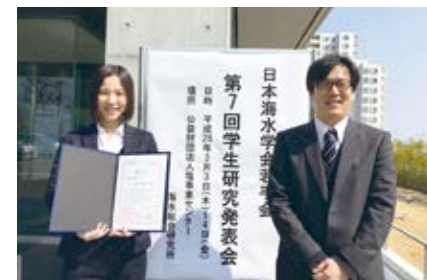
年生の野口万里奈さんの「多くの命を繋ぐ道」が優秀賞を受賞し、5月20日の第53回通常総会で表彰されました。受賞者の中では唯一の学生です。

土木学会 100 周年事業のウォーキングツアーに参加した時に撮影したそうです。トンネルの非常通路として活用される空間を捉えた幻想的な写真です。その題目と共に印象的な作品となり評価されました。

応用分子化学科

土屋さん（受賞時 B4）が 日本海水学会若手会第 7 回 学生研究発表会にて優秀賞 を、化学工学会第 81 年会 にて学生奨励賞を受賞！

本学科 4 年生の土屋侑子さんが春の学会シーズンに 2 つの賞を受賞しました。



指導教員である松本准教授（写真右）とともに

平成 28 年 3 月 13 ～ 15 日に開催された化学工学会第 81 年会では対象ポスター 443 件に対して、最優秀学生賞 10

件、優秀学生賞 37 件、学生奨励賞 24 件で、学部 4 年生の受賞は極めて稀な受賞となります。大学院への進学後もますますの活躍を期待しています。

日本海水学会若手会第 7 回学生研究発表会
題目：『脱 K 苦汁からの Ca・Mg の回収と高品位化 - CO₂ ファインバブルを用いたドロマイトの製造 -』

化学工学会第 81 年会

題目：『製塩苦汁への CO₂ ファインバブルの導入によるドロマイトの反応解析』

山田康治教授の最終講義を開催



2006 年に広島大学より着任され、10 年間にわたって本学科の教育、研究、

運営にご尽力頂きました山田康治教授が、本年 3 月に節目を迎えられることになり、多くの卒業生や学部教員が参加するなか、最終講義が開催されました。

最終講義タイトル：「典型元素ハロゲン化合物の結合性と構造そして機能性」

（独）日本学術振興会特別 研究員—PD の諸崎博士の 研究が Chem-Station に 掲載！

諸崎友人氏（当時 D3）の研究が極めて HOT な研究として評価され、化学関連のポータルサイトとして有名なサイトである Chem-Station のスポットライトリサーチに取り上げられました。今後、ますますの活躍を期待しています。

スポットリサーチの記事 URL：
http://www.chem-station.com/blog/2016/02/scabone.html

建築工学科

平成 28 年度新入生オリエンテーション

本年度、205 名の新入生を迎えた建築工学科では、4月16・17日に、新入生を対象とするオリエンテーションが実施されました。本オリエンテーションは、新入生が大学生活のスタートを切る時期に、学生同士や教員との親睦を深めることを目的として毎年行われているものです。

本年度も、日本大学軽井沢研修所において、1泊2日で、2班に分かれて研修が行われました。

1日目は、天候に恵まれ、A 班は研修所内でスポーツを、B 班はレンタルサイクルなどで軽井沢の散策を楽しみました。夜には、10 名前後の学生と数名の教員から成るユニット（全 20 ユニット）に分かれ、初日の感想や翌日の予定を中心とした自由な話し合いが行われました。

2日目は、あいにくの雨天となりましたが、バスに分乗して軽井沢の散策を行いました。

研修の一つであるスポーツでは、サッカー、バスケットボール、ソフトボールなどから各自で種目を選び、仲間を募って編成したチーム同士、力いっぱい対戦する様子がみられました（写真上段）。

もう一つの研修は、軽井沢の散策です。外国人宣教師により避暑地として整備された軽井沢には、睡鳩荘【ヴォーリズ設計】（スケッチ右下）・小さな森の家【吉村順三設計】・夏の家【レーモンド設計】などの別荘建築の他、聖パウロカトリック教会【レーモンド設計】をはじめとする教会建築、万平ホテル【久米設計創設者 久米権九郎設計】（写真左下）などの歴史的価値のある建築が数多くみられます。各ユニットで決めた見学先では、



先生の話に耳を傾けたり、仲間同士で語ったり、スケッチや写真撮影をしながら建築に親しむ姿がみられました。また、ソフトクリームを頬張ったり、特産ジャムを購入したりと、軽井沢ならではの食べ歩きも楽しんでいました。

軽井沢の清々しい空の下、スポーツや散策を通じて、仲間との絆を深められたのではないかと思います。

マネジメント工学科

学外オリエンテーションや Entre-to-Be など

マネジメント工学科では、学部新入生 199 名、そして大学院生として博士前期課程 12 名を迎えて新学期をスタートしました。4月16日から1泊2日で実施された新入生学外オリエンテーションでは、全員で2日間スマートフォンなどの携帯電話の電源を切って、対面でのコミュニケーションを重視する日本初の試みを行いました。千葉県のマザー牧場での活動を中心とした、この試みは学外からも注目され、5月2日にはテレビ東京の「ワールドビジネスサテライト」で放映されました。学生からは、スマホが無くなると、相手の話に集中する事が出来て良いコミュニケーションが取れるようになったと好評でした。

生産工学部では、今年から事業継承者や企業家を体系的に育成する



「ワールドビジネスサテライト」テレビ撮影の様子

「Entre-to-Be」という日本の理工系学部では初となるスペシャルプログラムを全学科から学生を選抜して実施しています。このプログラムはマネジメント工学科の平田教授を中心にして商学部と連携して作られ、企業での実務経験の豊富な本学科の平田教授、豊谷教授、水上専任講師に加え、現役の経営者や税理士等が講師陣に加わり、学生の指導に当たっております。本プログ



ラム履修生 83 名の中で、マネジメント工学科からは選抜された 22 名の 1 年生が、毎週熱心に受講しております。本学科内のマネジメント教育に加え、組織トップである企業家・経営者のマネジメント・スキルと姿勢を身に着けるための理想的な教育環境を整え、日本大学のスローガンである「自主創造」的企業家の育成を目指しています。

数理情報工学科

「新入生 166 名が仲間に加わりました」

今春、数理情報工学科には 166 名の新入生が新たな仲間として加わりました。そして入学式の翌日から週末にかけて(2016 年 4 月 8 日～9 日)、新入生と教員約 20 名とで奥日光へオリエンテーションに行ってきました。

日光で新入生の皆さんは 28 チームに分かれてフォトアドベンチャ(オリエンテーリング)を行い、地図を片手に街

の各所に隠されたフォトポイントを巡って難問に回答。一位となったチームには夕食の会場で表彰状が授与されました。

生産工学部の正門でバスに乗車した時は神妙な表情だった学生の皆さんは、フォトアドベンチャを終えて奥日光のホテルで温泉に入って語り明かした後の翌日朝、チームビルディングは既に完成形に近づいたようでした。



奥日光のホテル前での集合写真



フォトアドベンチャ優勝チーム

「大学院生が台湾で開催された国際会議で発表しました」

2016 年 4 月 30 日に台湾桃園市で開催された国際会議 ICFMS 2016 (主催: 桃園市政府、中国科技大他) で、見坐地研究室の大学院 2 年生小野寺勇哉君が、基調講演として研究成果を発表しました。

本発表はランニング動作における足の筋肉の疲労度を定量化すると同時に、関節回りの瞬発力を定量化したものを論文としてまとめたもので、今後台湾マラソン管理協会及び中国科技大との共同研究に発展する予定です。



ICFMS で発表中の小野寺君

創生デザイン学科

藤井愛助教が着任

4 月 1 日付けで、藤井愛助教が着任されました。主な研究分野は「認知心理学」、「人間工学」などで、ヒトとモノのことがわかる研究者として今後の活躍が大いに期待されます。



星野和義教授が定年退職されました

星野和義教授は平成 28 年 6 月 5 日をもって、定年退職されました。星野和義教授は昭和 48 年 4 月に日本大学生産工学部に着任されて以来、42

年の長きにわたり、学生の教育および研究指導に務められ、日本鋳造工学会関東支部理事、日本機械学会機械材料・材料加工部門運営委員などを歴任し、鋳造による造形手法や素材の性質に関する研究に従事してこられました。大学においては、鋳造を中心とした材料加工に関わる授業を受け持たれ、近年では 3D プリンタによる造形手法も取り入れるなど、新しい鋳造技術の開発にも積極的に取り組まれてきました。

国際デザイン展 International Contemporary Furniture Fair (ICFF) 2016 に出展しました

2015 年 10 月 24 日～11 月 3 日に開催された TOKYO DESIGN WEEK 2015 において学校作品部門でセミグランプリ、プレゼンテーション部門で 2 位を獲得したデザイン作品「ぶ

んしんのじゅつ!!!」を、アメリカ・ニューヨーク JACOB JAVITS CONVENTION CENTER で 5 月 14 日～17 日に開催された ICFF 2016 へ出展しました。創生デザイン学科の卒業生 1 名、在学生 17 名が指導教員 1 名(田中遵准教授)とともに渡米し、設営、展示、来客対応などを現地スタッフらと協働しながら行いました。海外で実施される展示会への作品出展は、学生にとっても貴重な経験となったことでしょう。



環境安全工学科

学生受賞 教育研究活動が活発に！ 就職率 3 年連続 100% 達成！！

2016 年 3 月に日本機械学会関東学生会第 55 回学生員卒業研究発表講演会で 4 年生の由井寛久さんが Best Presentation Award を受賞しました。同じく 4 年生の加藤千晶さんが社会連携講座のミニシンポジウム Discovery in Fragmentation において研究成果を英語で発表しました。また、山崎研究室所属の博士後期課程の鈴木圭さんが日本エネルギー学会において日本エネルギー学会奨励賞を受賞しました。



受賞式後の由井君

当学科卒業で現在大学院土木工学専攻博士前期課程に在籍中の清水晴希さんが、習志野市の住みやすい街づくりに向けてアイデアを提案する催し

で、政策を提案しました。また、秋濱教授が 2015 年度日本機械学会東海支部賞研究賞を受賞され、2016 年 1 月に日本機械学会フェローに認定されました。学部生、大学院生、教員の研究活動が活発になり、成果が学協会など学外で認められています。

海外派遣研究員として 1 年間英国シェフィールド大学に留学していた保坂准教授が 3 月に帰国し、今年の 3 月から 1 カ月間海外派遣研究員として武村准教授が米国ハワイ大学に留学しました。また、4 月には永村助教が着任され、今後さらなる教育研究活動の発展が期待されます。

2016 年 3 月には 134 名が卒業し、



シェフィールド大学 Tait 教授と保坂先生

就職希望者全員の就職が決まり、3 年連続就職率 100% を達成しました。

4 月には 1 年生 131 名を迎え、4 月 9 日、10 日と山梨県で学外オリエンテーションを実施しました。青木ヶ原樹海でのエコツアーやリニア見学センターの見学、宿でのグループミーティングなど、学生同士や教員との親睦を深め、大学生活に良いスタートを切ることができました。

教養・基礎科学系

新入生歓迎会が開催されました



教養・基礎科学系では生産工学部の全学科に所属する学生を対象とする共通教育、特に 1 年生が多く履修する科目を主に担当しています。そのため、4 月に入学した 1 年生の円滑な大学生活を支援する目的で実習イベントと題して各種行事を毎年行っております。

今年度も 1116 名が参加し、立食パーティースタイルで 1 年生同士や教員との交流を深めつつ、生産工学部の先輩方による公認サークル紹介などを聴きながら、本格的に始まる大学生活への期待を膨らませているようでした。

日本物理学会論文賞を受賞

物理学系科目を主に担当している三角尚治准教授が共著者として参加した論文が、一般社団法人日本物理学会第 21 回論文賞を受賞しました。この賞は日本物理学会が刊行している英文雑誌に掲載された原著論文のうち、独創的かつ物理学に重要な貢献をした論文に与えられる賞です。今後教養・基礎科学系の教員一同、教育面はもちろん、研究においても社会貢献を積極的に行っていきたいと考えております。



「失敗」が「志」を磨き、 仕事を「次元上昇」させる鍵となる

生産工学部は、学生が中心のキャンパスをめざし、教職員はもちろんのこと多くの方たちがさまざまな形で学生をバックアップしています。中でも一段と心強いサポートをしてくださる卒業生の方々を紹介するのがこのコーナーです。今回は、大規模な技術計算を扱うシステム開発をはじめビジネス向け携帯アプリなど新しい分野で技術を創りだす株式会社東京技術計算コンサルタント社長の倉川清志さんにご登場いただきました。

株式会社東京技術計算コンサルタント
代表取締役社長 **倉川清志 氏**

■ものづくりの素養を培った幼少期から中高時代

父が国鉄の技師で図面を書く姿を見ていたことや、母方の祖父が下駄作りの職人で、木を切ったり、カンナを研いだりと、ものづくりと近い環境で育ちました。

中学、高校で数学と出会うわけですが、どちらかというと「アキレスと亀」やパズルといった謎解きに熱中していたように思います。最近所持品を整理していると、中学時代に作った「消える妖精」という図形消滅パズルが出てきましてね（笑）。その頃から、普段当たり前と考えられている事柄でも少し見方を変えると新しい使い方や価値を生み出すものづくりや数学の思考に魅了されていました。そこで日大生産工学部の数理工学科を目指したのです。

■チャレンジ精神が磨かれた日大生産工学部

大学の入学式は衝撃でした。その当時、日大生産工学部は高校からの内部進学生がほとんどで、初日から大騒ぎの盛り上がりでした。それまで書道や柔道など、どちらかというと「静」に身を置いていた私でしたが、こうなったら何か新しい「動」に挑



戦しようと思った部活がサーフィン部。ところが、サーフィンのイメージと打って変わって体育会系のスパルタな部活で、入部時 35 名だった部員は 2 年になると 2 名になっていました（笑）。

同じ時期に学業の方面では、柴田耕一先生の授業の中で朝日新聞が NASA のスペースシャトルで行う実験を募集していることを知り「水鉄砲の水が板にあたったときの跳ね返り実験」に応募しました。提案は通過しませんでした。力学を専門に教えていた柴田先生との交流が深まり、ゼミも柴

田研究室を選択して、ユニークな仲間とともに数々の研究を共にしました。こうした思い出もあって、卒業から 35 年経った今でも毎年年初に柴田先生の家へ挨拶に伺っています。

■生産実習で気付かされた「力学」への思い

就職活動が始まる 3 年時に、「生産実習」として構造計算を行う設計事務所と住宅デザインを行う設計事務所にて 1 カ月ずつ現場での仕事を体験しました。

数理工学科の設計製図コースに所属し

PROFILE

倉川 清志（くらかわ・きよし） 昭和 34 年東京都足立区生まれ。57 歳。1982 年 3 月日本大学生産工学部数理工学科（現 数理情報工学科）卒業。同年 4 月株式会社東京技術計算コンサルタント（ttc）入社。造船向けプログラム開発を中心とした同社事業から地下埋設物管理システムの開発を手掛け、26 歳で東京ガスに出向。31 歳に ttc 取締

役に就任。37 歳で代表取締役社長となり、CAD/CAM 関連事業の幅を広げる他、業者向け携帯アプリ開発事業部を設立。オーナー株の保有数で 42 歳から一時副社長となるが、この時期に一般社団法人メキキの会に参加。現在 ttc 代表取締役社長を務めながら、「志からビジネスをする人を増やす」活動を広げている。



ていたことから、先輩は建築関係の仕事に就く方が多かったのですが、この実習で自分が想像していた仕事と異なることがわかり、柴田ゼミで学んでいた「力学」を生かして仕事をしたいという強い思いが芽生えました。その後、造船のシステム設計、性能設計、構造解析を行っていた当社の採用試験を受けて入社することになったんですね。

振り返ってみてこの「生産実習」が人生の選択に果たした役割はとても大きいものであったと思います。今でこそ「インターンシップ」と呼ばれる就業体験制度ですが、会社側の業務に負担がかかることから、そのほとんどが 1～2 日で終了となります。これに対して日大生産工学部は、学部創設当初から企業や官公庁と関係を築き、実績を積んできたため長期的な受け入れが可能となっているのです。

学生の皆さんには、本学が育んできた「生産実習」という貴重な伝統を大いに生かして、自分の性格や能力にあった後悔のない就職活動に繋げてほしいと思います。

■50 周年を迎えた成長の歩みと社是「技術でサービスを提供する」

入社当初は、希望通りの造船の構造計算プログラムに従事しましたが、その後、造船不況となりその仕事は無くなりました。

私は、ガス管や水道管など地下埋設物の管理システムを作成する仕事に、ひとり出向となりました。当初は慣れない環境でとまどいもありましたが、その仕事が次第に大きくなり部下も増え、私も技術者から管理者へ成長しました。この時代の変化に対応できたのは、技術計算という狭い分野で専門性の高い技術者が既に集まっていたことが理由の一つといえるでしょう。

今年で会社は創業 50 周年を迎えます。創業以来「技術」を社名に冠し、技術にこだわってきました。これまでは「技術」だけにこだわってきた感があるので 4 年前に社是を「技術でサービスを提供する」としました。「サービスを提供する」ことにも

こだわっています。

お客さまのビジネスの継続、発展に当社のサービスが貢献できれば、それが社会貢献だと思っています。

地下埋設物システムではガス管、水道管、下水管などを管理します。これらのインフラは人々の生活と直接関係します。震災などの緊急事態が起これば、1 日でも早く復旧できるようなシステムを構築することで復旧の支援をしています。これからも、専門性の高い技術で社会インフラに貢献するやり甲斐と責任をもって、事業を展開していきたいですね。

■「PDCA(Ascension)」に欠かせない「失敗」と「志」

副社長時代に、「一般社団法人メキキの会」に参加しました。

多様な人が肩書きを置いて個として集まり、つながり、専門分野を通して良い世の中をつくろうという会です。技術者としてスキルアップを追求してきた私でしたが、この会で、いろいろな価値観に出会い、ビジネスの多様性に触れ、それを行う人の「志」が世界を創りあげていることを知りました。そして、私はその中で「志ビジネスミーティング（朝会）」を行ない、志からのビジネスプレゼンテーションを磨く場を提供しています。

今、私は社内で「PDCA」の実践を推奨しています。「PDC」とは「Plan（計画）」、「Do（実行）」、「Check（点検・評価）」の頭文字で、この後に来る「A」は「Act（処置・改善）」と考えられてきましたが、どうも「PDC」で完結しているようで、この「A」が、ピンときませんでした。

社内で「C」の振り返りを行った後にしていることは振り返りの結果を全社的に活かすための広報（発信）です。

失敗したこと、うまくいったことを他チームでも我がこととしてとらえられるよ

うに抽象度を上げて、広報します。失敗したことを公然と言えるようになったら、その失敗の経験は生かされています。ひと回り成長したと言ってもいいと思います。失敗を単なる反省に終わらせるのではなく、次の次元に成長するためのエネルギーとする過程、それが「A」だと思います。そのた



め、私は「A」をあえて「Ascension（次元上昇）」と呼んでいます。

失敗しては、それを糧にひと回り大きくなって欲しい。いろいろなことに挑戦するとスキルが磨かれます。たとえ失敗しても、それを糧に次元上昇してほしい。失敗を乗り越えた数だけ成長します。そして、その過程で「志」が磨かれていくと思います。

私の人生もそうです。今、失敗だと思っていることは必ず後の成功に繋がっています。

今の時代に歴史ある日本という国に生まれたことに感謝して、精一杯、目の前にあることに挑戦してください。



◀中学生の時自作した「消える妖精」。上半分の板を左右入れ替えると小人の数が変わる

【取材後記】

1 台のノートパソコンと電話、専門書が並ぶ棚以外にはバツと見て目に入る物のないシンプルな社長室の空間が、明晰な技術者としての思考と飾り気のないお人柄を窺わせます。学生時代に作ったという「消える妖精」のパズルを懐かしく紹介する優しい笑顔が、物腰柔らかい経営者の印象を与える倉川さん。その雰囲気がおフィスにも伝わりながら、先鋭の技術者集団が自由な発想で各々プロジェクトに向かっている姿をみて、社会の基底部を支え、生活を守っている心強い現場を肌で感じた取材となりました。

平成 27 年度学位取得者一覧

次の方々が平成 27 年度に博士の学位を取得されました。
今後のご活躍を期待しております。

課程修了によるもの					
専攻	学位	氏名	論文題目	学位授与大学	授与年月日
機械工学専攻	博士（工学）	荒深 純一	摩擦攪拌接合における初期接合条件に関する研究	日本大学	平成 28 年 3 月 25 日
土木工学専攻	博士（工学）	加納 孝志	繰返し再生利用を考慮したアスファルト混合物に関する研究	日本大学	平成 28 年 3 月 25 日
土木工学専攻	博士（工学）	小森 篤也	FRP 材を用いた道路橋 RC 床版の補強法および耐疲労性の評価に関する研究	日本大学	平成 28 年 3 月 25 日
土木工学専攻	博士（工学）	佐藤 克己	舗装の健全性を考慮した簡易な路面下空洞評価に関する研究	日本大学	平成 28 年 3 月 25 日
応用分子化学専攻	博士（工学）	諸崎 友人	リン、硫黄およびセレン配位子に安定化されたカルボンの合成、構造および4電子供与特性	日本大学	平成 28 年 3 月 25 日
論文提出によるもの					
専攻	学位	氏名	論文題目	学位授与大学	授与年月日
建築工学専攻	博士（工学）	石井 政雄	地方小都市における知的社会基盤の形成に関する研究	日本大学	平成 27 年 11 月 30 日

「学生 FD 推進プロジェクト」が始動！

(学生 FD スタッフを公募します)



学生 FDCHAmiT2016 ポスター

日本大学では、FD※を「自主創造の理念の下に〈中略〉、教員が職員と協働し、学生の参画を得ながら組織的に取り組む諸活動」と定義しています。

この一環として、日本大学 FD 推進センターでは、全学部・学科の学生・教員・職員が一堂に会し、学習・教育の実態に理解を深め、気軽な雰囲気の中、改善策を語り合う「日本大学 学生 FD CHAmiT」を 2013 年度より開催してきました。

4月から始動した「学生 FD 推進プロジェクト」を担う私たちも、これを通じて出会い、FD に大きな可能性を感じています。

本プロジェクトは、学生が「発見力」・「発案力」・「発信力」を発揮しながら学

生・教員・職員が『三位一体』となって FD を推進し、学習・教育の場を活性化することを目的とした本学部独自の取り組みです。

私たち学生 FD スタッフは、学生目線から学習・教育の問題点を発見し、教職員と連携しながら改善策を提案し、成果を学内外に発信することを目標にさまざまな活動を展開していきます。これらを通じて、日本大学・生産工学部とともに私たち自身が成長していくことを楽しみに、皆様からの温かなご支援・ご協力を宜しくお願い致します。

学生 FD スタッフ一同

※FD（ファカルティ・ディベロップメント）とは、学習・教育を改善するための組織的な取り組み

「生産工学部創設 60 周年記念事業募金」寄付者ご芳名

創設 60 周年記念事業募金にご賛同頂き心から感謝申し上げます。

平成 27 年 6 月から平成 28 年 5 月までにご寄付を頂戴した皆様のご芳名を記載させていただきました。

なお、学部広報誌等へのご芳名の掲載を希望されていない方は、記載されていません。

在学生父母

小西 博之

校 友

齋藤 悠

教職員（退職者を含む）

大坂 直樹

小島 陽子

後藤 武次

渡部 真大

(敬称略、五十音順)

新キャラクター『生産タクマ&シーナ』の紹介



生産タクマ、生産シーナは生産工学部の新しいキャラクターです。

6 月 12 日（日）開催の『女子中高生のためのキャンパスカフェ』で本格デビューしました。

一卵性双生児のふたりは生産工学部に詳しい学生で、兄妹仲良くキャンパスライフをエンジョイしています。

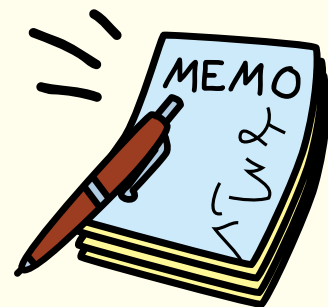
乗り物が大好きな生産タクマは、将来世界で活躍できるたくましいエンジニアを目指して勉強中です。

生産シーナは世話好きのしっかり者で、将来は経営センスを兼ね備えた理系出身の社長を目指して頑張っています。



飛んだり、走ったり、喜んだり、驚いたり、応援したり、紹介したり、考えたりもして、いろいろなポーズをしてるよ。

新 任 教 員 紹 介



機械工学科

教 授 平山 紀夫 (ひらやま のりお)



大手材料メーカーの研究所所長、取締役・執行役を勤めた後、昨年10月から日本大学生産工学部機械工学科に着任いたしました。専門は航空機や自動車部材、並びに医療分野で用いられている先進複合材料に関する研究です。

企業におけるさまざまな経験を通して、研究者・技術者は、専門知識と基礎学力以外に高い倫理性を持っていないと社会で役立つ仕事ができないと痛感しています。そのため、日本大学生産工学部の学生諸君には、大学で共に過ごす時間の中で、謙虚な姿勢、公平性、他人への誠実で親切な対応、コンプライアンス遵守の大切さを積極的に伝えていきます。そして、生涯にわたって自己の向上に励み、社会を支える高い志をもつことの大切さを伝えたいと考えています。よろしくお願いいたします。

土木工学科

准教授 佐藤 克己 (さとう かつみ)



平成28年4月に土木工学科、施工計画研究室に着任いたしました。前職は、中日本建設コンサルタント株式会社東京支社に勤務しておりまして、下水道の設計計画、震災復興事業の計画立案、そして施工管理計画などに携わってきました。また、業務の傍ら、下水道管の健全性診断技術の開発やセンサーネットワークを使った土木インフラの状態監視技術の開発をしておりまして、大学でも引き続き研究していくつもりです。

私は、30年ほど前に本学部を卒業しましたが、社会に出てから生産工学部土木工学科の良さを改めて認識しました。バランス感覚の優れた技術者育成、先生や先輩方の面倒見の良さ、日大土木のネットワークなどなど、これらの素晴らしいことを私も実践し、そして学生たちに受け継いでいこうと思います。

環境安全工学科

助 教 永村 景子 (ながむら けいこ)



(株)文化財保存計画協会で文化財保全の実務経験を積んだ後、熊本大学にて博士号を取得、九州大学特任助教を経てまいりました。土木工学分野の計画系を専門とし、「安全で豊かな日本の風景を守り育てるプロセス」について、さまざまな地域に出かけて実践研究に取り組んでいます。今、日本の地域社会が直面している課題に対して、「まちづくり」、「地方創生」、「コミュニティ・デザイン」、といった観点から、「都市計画」、「景観・デザイン」、「土木史」の専門分野によりアプローチします。

学生の皆様には、問題解決能力を備えた「自ら考え行動できる人材」を目指して、地域づくりの実践の機会に携わり、将来を見通した地域主体の持続可能な風景デザインに、ともに取り組んでいただきたいと思います。

創生デザイン学科

助 教 藤井 愛 (ふじい あい)



専門は人間工学、認知心理学、実験心理学です。「デザイン」と聞くと、アイデアの良さやセンスの良さを思い浮かべがちですが、人間工学や心理学の視点を欠いたデザインは、利用者にとって使いにくかったり使い方がわからなかったりします。私は、心理尺度、アイカメラ、生理指標、筋電計、モーションキャプチャなどを利用して調査や実験を行い、これまでデザインの世界で感覚的に語られてきた人間の感じ方や体の動きを定量的に評価する研究を行っています。この分野の特徴は一般社会と密接な点であり、研究成果を商品の企画・開発や分析・改善に生かせることにもやりがいを感じています。

学生のみなさんには、デザインに関する学術的な視点やスキルを養い、社会に出てからも活躍できる人材になって欲しいと願っています。

教養・基礎科学系

助 教 JOHNSON MICHELLE (ジョンソン ミシェル)



アメリカ、フランス、イギリスで大学と大学院を終えました。平成16年にコロンビア大学大学院で、TESOL(外国語としての英語教授法)の学位を取得しました。

平成17年から日本で英語教育・研究に携わるようになり、平成19年から生産工学部非常勤講師を勤め、平成28年4月教養・基礎科学系助教として着任いたしました。

私の授業を通じて、一人ひとりの学生が、自信を持って英語を使ったコミュニケーションができるようになってもらえたらと思います。さらに、生産工学部によりグローバルな環境が構築できるよう、授業時間外のさまざまな活動にも取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

教養・基礎科学系

助 教 濱田 彰 (はまだ あきら)



本年度4月より教養・基礎科学系に着任し、主に英語教育を担当しております。

筑波大学で第二言語習得研究に携わり、現在は外国語習得の効率を上げるための指導・教材開発・テスト開発を行っています。

学生の皆さまには、単に「英語ができる」ではなく、英語を使って「 」ができるということを実感できるような教育を目指しております。カッコの中に入るものは人それぞれですが、ホテルを予約できるということから、研究のために必要な情報を収集できるということまで、Can-Doを意識した授業を行います。外国語は簡単に習得できるスキルではなく、継続的な取り組みが必要です。大学を卒業して指導者がいなくなったとき、一人で自立・自律した学習を進められるよう、一人ひとりの学習をサポートしていきたいと思っています。

教養・基礎科学系

助 教 町田 拓也 (まちだ たくや)



横浜国立大学にて博士(工学)を取得後、明治大学、日本学術振興会、University of California Berkeleyにて研究員を務め、本年4月に教養・基礎科学系 数学系列の助教に着任いたしました。専門は数学(確率論)です。現在は、量子コンピュータの研究に関係している数理モデル(量子ウォーク)の研究に取り組んでいます。

今年度の担当科目は、微分積分I、II、線形代数学II、数学演習、基礎数学演習、数学演習II、初年次ゼミ、2年次ゼミです。

自身の海外経験を生かし、グローバル化する日本社会で活躍できるような人材の育成を心掛けて、教育に取り組めます。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

第9回 風力発電コンペ WINCOM 2016

生産工学部では今年度も、「ものづくり」の素養とデザイン・アイディアに富んだ環境エネルギー機器の性能を競う「第9回風力発電コンペ WINCOM 2016」を11月に開催します。

中・高校生をはじめ、大学生・社会人のグループ、個人が独自の発想で風力発電機を作り、「ものづくり」の楽しさを味わうものです。

皆さんのすばらしいアイディア、作品を募集しています。

開催日：平成28年11月6日(日)
会場：日本大学生産工学部津田沼校舎 37号館 8階
エントリー期間：7月11日(月)～9月16日(金)
最大50チームの参加を募集しています！
応募要項：以下のURLよりご確認ください。
<http://www.cit.nihon-u.ac.jp/campus-life/event/wincom>

主催：日本大学生産工学部

後援：日本大学生産工学部校友会、日本風力エネルギー学会、
日本機械学会関東支部千葉ブロック、千葉県教育委員会

■お問合せ：日本大学生産工学部
第9回風力発電コンペ WINCOM2016 事務局
TEL/FAX：047-474-2461
E-mail: cit.wincom@nihon-u.ac.jp



コンペ会場入場には特に事前登録など不要ですので、
直接会場において戴きご声援をお願いいたします。

津田沼航空研究会が「第39回鳥人間コンテスト2016」の滑空機部門に出場決定！

書類審査の難関をクリアし、鳥人間コンテストへの出場が決定しました！

2014年は思うようなフライトが出来ず、結果を残すことができませんでした。そして2015年。前年のフライトの反省を生かした設計に取り組むも、まさかの書類審査で落選という結果でした。2016年はリベンジを誓い、結果を出せる機体を生み出すために妥協の無い設計・製作を行ってきました。

今年の機体名は“匠”。その名のとおり、これまでに培われた伝統ある技術を生かして機体製作に励んでいます。今年は既にテストフライトを実施し、機体特性の把握を開始しています。

部員29名が一丸となって、まずは大会学生記録更新を目指して頑張っています。

ぜひ、応援をお願い致します。



実習グラウンドにおけるテストフライトの様子



今年の垂直尾翼デザイン

開催日：7月30日(土)・31日(日)
開催場所：滋賀県彦根市琵琶湖松原水泳場
大会主催：読売テレビ
<http://www.ytv.co.jp/birdman/>

平成28年度行事予定(後期)

行 事	2～4年次：津田沼校舎	1年次：実習校舎	大学院	備 考
A O 入 学 試 験	9月10日(土)、11日(日)			
後 期 ガ イ ダ ン ス	9月15日(木) ※応用分子化学科1・2・3年のみ9/14(水)、15(木)		9月15日(木)	
後 期 授 業 開 始	9月16日(金)			
祝 祭 日 通 常 授 業 日 (後 期)	9月19日(月・祝)、22日(木・祝)			
父 母 懇 談 会 (秋 季)	9月24日(土) 津田沼校舎			10月15日(土) 地方別実施
卒業式・修了式・学位記伝達式(9月)	9月29日(木)		9月29日(木)	
創 立 記 念 日 の 休 日	10月4日(火)			休 校
編 入 学 試 験 (2年次・3年次)	10月8日(土)			
外国人留学生入学試験(第1期)	10月8日(土)		10月8日(土)	
帰 国 生 入 学 試 験	10月8日(土)			
校 友 子 女 入 学 試 験	10月8日(土)			
学 部 祭 (桜 泉 祭)	11月5日(土)、11月6日(日)			11/4(金) 準備日 11/7(月) 片付日
オ ー プ ン ラ ボ	11月6日(日)			
風力発電コンペ(WINCOM2016)	11月6日(日)			
指 定 校 制 推 薦 入 学 試 験	11月12日(土)			
提 携 校 推 薦 入 学 試 験	11月12日(土)			
保健体育審議会推薦入学試験	11月12日(土)			
トップアスリート推薦入学試験	11月12日(土)			
付属高等学校等推薦入学試験	11月13日(日)			
博 士 論 文 提 出 期 日			11月18日(金)	
一 般 入 試 対 策 講 座	11月27日(日)			
学 術 講 演 会	12月3日(土)			
公 募 制 推 薦 入 学 試 験	12月10日(土)			
事業継承者等推薦入学試験	12月10日(土)			
冬 季 休 業	12月26日(月)～1月6日(金)			
後 期 授 業 終 了	1月30日(月)			学部、大学院：1/21、24、25、26、28は試験/授業準備日
補 講	土曜日適宜実施			入学試験、学部祭、学術講演会等他の行事のある日を除く
大 学 入 試 セ ン タ ー 試 験	1月14日(土)、15日(日)			
修士論文概要(初稿)提出期日			1月20日(金)	
一般入学試験	N1方式	2月1日(水)		
	A1方式	2月2日(木)		
	A2方式	2月9日(木)		
	A3方式	2月19日(日)		
後 期 追 試 験	2月14日(火)、15日(水)			
修 士 論 文 提 出 期 日			2月20日(月)	
転 科 試 験 (2 年 次)	2月27日(月)			
外国人留学生入学試験(第2期)	3月4日(土)		3月4日(土)	
大学院入学試験(第2期)			3月4日(土)	
卒業式・修了式・学位記伝達式	3月25日(土)		3月25日(土)	日本武道館

個人情報の取扱い告知文

日本大学生産工学部

入学手続時及び在学中に収集する学生本人及び保証人の氏名、住所、生年月日及びその他の個人情報、学籍・成績管理、教育、学生生活支援、学費の案内、図書館利用、就職支援等及びこれらの業務に付随する学生及び保証人への連絡・通知・掲示等、本大学の教育事業に必要な範囲で利用します。

また、これらの業務の一部を業者に委託する場合があります。この場合、当該業務の委託を受けた業者は、上記利用目的の達成に必要な範囲を超えて個人情報を利用することはありません。

なお、本大学では、学生への教育・指導をより適切に行うため、保証人に対して学生の学業成績及び出席状況等の開示並びに履修状況等についての相談を行う場合があります。

(問合せ先) 生産工学部教務課・学生課

学生食堂



津田沼キャンパス 2号館は食堂専用棟



爽やかな津田沼キャンパス 39号館 2Fの中庭テラス席



実効キャンパス食堂棟Ⅱは学生同志の交流の場にもなっている



カジュアルな津田沼キャンパス 39号館 2Fのカフェテリア



焼きたてのパンや本格コーヒーが楽しめる津田沼キャンパス 39号館 2Fのカフェ

学生食堂は津田沼キャンパス、実効キャンパスとも2カ所ある。最も新しい津田沼キャンパスの39号館は、広いスペースに雰囲気の違った多様な空間が演出されており、食事をするだけでなく、くつろぎの場としても気軽に利用されている。



活気ある雰囲気の実効キャンパス食堂棟Ⅰ

SPRING

No.107

日本大学生産工学部 2016年8月2日発行

- 学部長メッセージ
- 特集1 特色ある教育プログラム
- 特集2 学生生活支援 学生食堂レポート
- 2015年就職状況の概要
- 学科 ニュース
- 連載/卒業生インタビュー
東京技術計算コンサルタント株式会社 代表取締役社長 倉川清志氏
- 平成27年度学位取得者
- 事業募金寄付者で芳名
- トピックス 学生FD推進プロジェクト
新キャラクター紹介
- 新任教員紹介
- CAMPUS NEWS
- 平成28年度後期行事予定表

スプリング
SPRING No.107
 (日本大学生産工学部だより)
 平成28年8月2日発行
 編集・発行 日本大学生産工学部 広報委員会

本誌に関する照会その他は下記へお願いします。
 〒275-8575 千葉県習志野市泉町1-2-1 日本大学生産工学部 庶務課
 電話 047-474-2201 FAX 047-479-2432
 E-mail : cit.info.shomu@nihon-u.ac.jp
 http://www.cit.nihon-u.ac.jp/

